
死にたがりの僕は生きたがり

吉菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死にたがりの僕は生きたがり

【Nコード】

N2474Y

【作者名】

吉菜

【あらすじ】

死にたがりの主人公 吉村湧真。性別は女。そんな彼女はあることがきつかけで死にたがりになってしまった。そのきつかけとは・・・？だが死にたがりである彼女が死ぬことのできない生きたがりであった。矛盾だらけの彼女。そんなある日いつもの通学路で車に轢かれ死んでしまう。しかし死んだはずの彼女が目覚ますとそこは水の中。一体何があったのか？ここは何処なのか？最後に待ちつける運命とは？彼女は死ぬのか、それとも生きていくのか・・・？

思い

僕は死にたがり屋である。

それなのに僕は死ねない。

手首を切った僕は無意識に手加減をしてしまう。

大量の薬を飲んでも、無意識の中、死ぬことは無いという確信があるのだ。

そんな僕は、死にたがりの生きたがり屋だ。

名前 吉村よしむら 湧真ゆうま

年齢 16歳

誕生日 12月

身長 161?

体重 46?

友達関係は上々。

人からの印象は好印象。

先生からの印象は好印象。

勉強はそこそこ出来る。

運動神経は拔群^{ばっぐん}。

そんな僕は女である。

そして・・・

この上なく病^やんでいる。

キャラって意外と大事だよね。

やっぱり、自分のキャラを固定しないと面倒って言うか…

ややこしくなるじゃん？

自分を作らなきゃ世の中やっていけないといいますが…

そのためには家族にさえキャラを演じないとボロがでちゃうわけで。それを長い事続けると疲れるわけで。

ストレスとかも溜まっていくわけで。

で、実際の僕は病んでるわけで。

そんな僕の事情を家族や友達が知るわけなくて…

一人で泣いて、1人の時しか休める時がなくて…

でも1人が怖くて、そんで一人で勝手に孤独を感じてて…

死にたくて、死にたくて…

切った手首の血でノートに“死にたい”って書いてみたりして…

切った後の手首は痛くて…

泣くほどの痛さでもないのに涙が止まらなくて、今の気持ちをどう表現したらいいのかわからなくて…

泣き過ぎで息が詰まって、このまま死ねたらなああって思ったりして…

でも死にたくなくて…

心の中で助けを求めるけど、誰に？

僕のすべては偽りなのに…

誰に助けを求めるの…？

神様？

今まで何度も“神”を信じようとしたけれど…

アナタはいない存在だから僕を助けてはくれないでしょう？

思い（後書き）

編集しました！

一度目の死

溢れる涙は何故か止まらなくて、止まらない涙のせいでまた涙が溢れだして、どうしたらいいのかわからない。

何故自分は泣いているのか、言葉にできなくて、表現できなくて、虚しくて…

いつもいつも何のために生きているのか…

人は何を思い、生きているのか不思議でたまらない。

自分も人間だけど、他の人の思いを理解したくてたまらない。

何故生きているのか、何故人を愛するのか、何故、何故、何故？

知りたくて、知りたくなくて…

朝、僕は家を出た。

いつものバス停へ向かうため、車がないことを確認し、横断したつもりだった。

それなのに…

目の前には大きなトラックが一台いて、頭が真っ白になって、それから…

僕の意識はぱったり途切れた。

新たな始まり(1)

ザバツ・・・

「ゲホゲホツ・・・何・・・これ、どーなってんの？マジあり得ないんですけど・・・。」

マジのマジであり得ない・・・何で水ん中？めっちゃ冷たいし、寒いし・・・頭可笑しいだろ・・・下手したらコレ死んでますけど。

つかどーなってんだコレは・・・イジメか・・・新手のイジメだろ・・・だったらこんなことに・・・ってあれ？

まてまてまて・・・ん？車に・・・跳ねられたような気がするのには・・・自分だけだろうか・・・。

痛いところは無いし、傷もない・・・。

「死に損ねた・・・のかな？」

湧真は自分の手首を見つめた。

「きつたねー手首・・・。」

湧真は悲しそうに手首を擦る。

痛々しい傷がくつきりと、戒めるかのように残っていた。

「・・・何でこうなったんだろっとな。」

返事なんかあるわけないのに応えを求めてしまう・・・
応えがほしい・・・誰でもいい・・・誰でもいいから・・・

「…なーんて、応えなんか帰ってくるわけないよね。」

誰かが応えてくれるわけない。誰かが助けしてくれるはずない。だってこれは、自分の問題だから。誰かが応えられることじゃない。こんなことになったのを知ってる人なんていない。応えは自分自身にしか掴めない。

「なくなりたい…。」

1人は心地よくて、でもどこか寂しくて、泣きたくなって、幸せじゃない気がして…

それにここは本当に無のようで、音も無くて、心が冷たくなっていく…
体もビシヨ濡れで、心も体さえも…

「森ん中で1人とか…飢え死にしろってことかな。」

涙が滲み目の前が歪んでいく。泣きたいわけじゃないのに…。

「やだ、やだ、泣くな、バカみたい…ガキじゃないんだからさあ、泣くなよ…。」

自分に言い聞かせるかのように弱々しい声で、きつい言葉を自分に投げかける湧真。

その姿は痛々しく、強がっているようにしか見えなかった。湧真はただ声を殺して泣いた。誰も聞いているはずなのに、誰もいないはずなのに、ただただ静かに泣いた。

「疲れた！何で泣くだけでこんなに疲れるんだろ、ほんと嫌になるわ…ととと。」

腫れた目を擦りながら立ち上がると立ちくらみが襲ってきた。湧真はそのまま前のめりに倒れ込んでしまった。

「いったあー…ほんと今日ついてない…。」

両手を見てみると血が滲み、皮がべろつと剥けていた。

「痛い、絆創膏なんて普段持ち歩いてないし…これ放っておいたら絶対）

ぜったい）化膿するよね…。」

とり合えず、水は近くにある。

…よし、傷口を洗お、う。

「うっ痛い…もーヤダ。死ぬ。砂入ってるし…泣くよ?。」

1人ごとをブツブツブツと呟きながら湧真は必死に砂を穿りだした。

ガサッ

「え…何?。」

草むらから突然気配を感じ、落ちていた木の枝を拾い辺りを警戒する。

ガサガサッ

「無理——————！！！」

何かが草むらから出てきたがそんなことはない。

湧真は姿を見る前には猛ダツシユで森を駆けぬけた。

無理無理無理！！怖いし、絶対太刀打ちできないっ！！これは逃げ
といた方が先決だ、うん。

ガサガサガサッ

ひっっ　　！！

追っかけてきてる————！！？

やだやだやだ！！

つか速いっ！！

追いつかれる　　！！

と思ったのもつかの間…

湧真の背中に激しい衝撃が襲って来ると同時にそのまま押し倒され、
身動きがとれなくなった。

顔は地面に押し付けられ、“何”に押し倒されてるのか全く分から
ない。

恐怖と痛みが止まらない。

何をされるのかわからない恐怖。このまま殺されてしまうのかとい
う恐怖。

湧真ゆまは恐怖のあまり意識を

…手放した。

新たな始まり（1）（後書き）

編集しました！。

新たな始まり(2)

「…捕まえたはいいが、こいつ気絶したぞ。」

男は湧真ゆしまの手を拘束するともう1人の男に声をかけた。

「ユウラス…君が乱暴なことをするからだろう？女の子を押し倒すなんて紳士のやることじゃない。」

もう1人の男は当然だとばかりにユウラスと言う男を責めたてる。

「…突然こいつが逃げるからだ…それに、そんなに文句を言うならお前が捕まえればよかつただろ。」

ユウラスは不機嫌そうに顔を歪め、男を睨みつける。

「はあ？あのね、俺はユウラスみたいに体力馬鹿じゃないの。ひ弱なの。君と一緒にしないでくれる？」

「…で、こいつはどうするんだ？」

ユウラスは言い返すのを諦めたように湧真ゆしまへと視線を戻した。

「うーん…連れてく？」

「な！？こんな素性そせいも分からないやつを城に連れていくだと？お前、気は確かか？」

ユウラスは呆れ気味に男の返答を待つ。

「正気だけど…それにその子の服装と髪と肌の色を見てもらんよ。」

「こいつ…」

ユウラスはまともに見ていなかった少女に視線を移し言葉を失くす。

「ね？これはやっぱり保護するべきでしょ？」

男は意味ありげな笑みを浮かべた …。

「ん…いつてえっ…！」

体を起こすと背中に…いや全身に筋肉痛のような痛みを感じた。

「つかこごとく…。」

自分は何故こんな豪華なベッドで寝てるわけ？

ちよ、頭が混乱して働かないんだけど…

よし、まず深呼吸をしよう、うん、そうしよう。

「スー…ハー…スー…「パンツッ！」うひい!？」

な、何事!？な、な、え？

目の前には男の人が2人と女の人が1人…
1人の男が近くまで来ると男は素早い動きで剣を振り下ろし、僕の首筋に触れるか触れないかのところで綺麗に止めた。
洗礼された動き…人を斬ることのみに特化した動き…
この男…斬ることに慣れている。
それなのに何故…

「…微動だにしないのか。お前は何者だ？」

…微動だにしないって…あんだ…。

何故微動だにしなかったのか…それは期待したからである。殺されることを。それなのにこの男、ユウラスはギリギリのところまで剣を止め、斬ることをしなかった。湧真ゆしんは殺してくれると、死ぬると思っただ。そんな期待を裏切られて、放心しない者などいるだろうか？死んだと思ったのだ。それにこの男は“殺そう”としたのだ。本気だった。なのに、斬らなかった。

「き…よかったんだ。」

「…何だと？」

湧真ゆしんは泣きそうになった。生きていることに。

「何で今、斬らなかった…？なんで…あんだ、今本気で殺そうとしたよね？なのに、何で……」

じわっと涙が溢れだした。

ぼろぼろ ぼろぼろ

悲しいわけじゃない。ただ生きていることが、殺されなかったことが悔しい。

「恐れか？」

ユウラスは冷たい声で湧真ゆしまに問いかける。

「お、そ…な、か…じゃ、ない…！」

恐れなんかじゃない ……！！

泣いているせいか上手く喋ることが出来ない。

息も上手く出来ない。

このまま…このまま死んでしまえばどんなにいいだろう…

息ができなくて死ぬ…滑稽な死に方じゃないか。

僕にはお似合いな死に方じゃないか。

「ふ…はは、はははっ…！」

思わず、笑いが漏れる。

「…何がおかしい？」

ユウラスは異常な者を見たかのように顔を歪めた。

「こ、けい…だ、つと、おも…った。自分、が、あ、あっあかつ…」

ああ、息が出来ないや…

あの時と一緒にだ…

もうこのまま…

と意識が遠のいた刹那、
“何か”が起こった
。

新たな始まり(2) (後書き)

編集しました！

新たな始まり(3)

『死にたくない癖に。』

冷たい声が何処からともなく響き渡った。

その声は、聞き覚えのある声だった。

声の正体は…

「僕…:？」

『ねえ…死にたくない癖に、何で死のうとするんだよ!？』

湧真ゆま自信の声こゑが、悲痛にも似た声で叫んでいる。

「死にたいんだよ…:。」

『嘘だ!!!』

嘘…:？

なんで嘘なんてつかなきゃならないの？

死にたいんだよ…:それだけじゃ駄目？

君に何がわかるんだよ。

僕の何がわかるっていうの？

『わかるに決まってるだろ!!!』

怒ったような悲しいような何とも言えない感情を含んだ声こゑが湧真ゆまを
攻め立てる。

最後に僕は満面の笑みで

狂ってないの
…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2474y/>

死にたがりの僕は生きたがり

2011年12月31日06時50分発行